

SHT Kat.-Nr. 33 中の未比定の 梵文阿含断簡について

岩 松 浅 夫

I 今世紀初頭の 4 次に亘るドイツの所謂トルファン探検隊によって、西域北道を中心とする中央アジア（東トルキスタン）の各地から将来された夥しい数のサンスクリットの写本類——その殆どは断簡であるが——は、Göttingen 大学の故 Waldschmidt 教授を中心に編集・刊行が開始され、今なお継続して行われている『トルファン写本目録¹⁾』（*Sanskriithandschriften aus den Turfanfunden*. 以下 *SHT* と略）によって、漸くその全貌が明らかにされつつあると言ってよからう。この *SHT* は、単なる目録というだけに留まらない、ある意味では研究書的な側面をも併せ持ったものであるが、特にその第 4 冊（Teil IV）では、第 1 冊に載録された Kat.-Nrn. 1～801 の写本からその中に複数（多数）の經典を含むものを重点的に採り上げて、研究がなされているのも周知であろう。

ところで、近時筆者は、あることのためにこの *SHT* について調べていたのであるが、その記事内容を、特に Teil IV について検討している間に、いくつか気付いたことがあった。そこでこの小論では、それら諸点の中でも、該書では未だ比定がなされずしたがって正体についてもよくわかっていないらしい Kat.-Nr. 33 の第 2 経について採り上げ、それについて述べてみたい。

II さて、Kat.-Nr. 33 の写本は前述の *SHT* Teil IV の研究でも採り上げられているのであるが、その第 2 経²⁾に関しては、Nrn. 7～16 の 10 個の断簡がこれに証定されている（ただし、7 は裏面から）。ところが、その経題云々のことに関しては、該書ではただ “Sūtra über die vier Bindungen an die Körperlichkeit und über die sechs Bereiche der Sinneswahrnehmungen” と言うのみで、具体的なパーリ若しくは漢訳の対応経の名などは掲げられていない。のみならず、そこではこの経は、パーリ聖典には対応するものが見出されない（für welches keine Pāli-Entsprechung gefunden werden konnte）とすら言われているのである。尤も、ただこのように言うだけではわかりにくいかもしれないので、多少補足的に説明を加えておこなうならば、標題（若しくは内容）に関連して ‘vier Bindungen an die

Körperlichkeit' と言われているのは、実は四つの「身繫」(kāyagrantha), 法数として言えば「四身繫」——具体的には、貪 (abhidhyā-), 瞋 (vyāpāda-), 戒禁取 (śīlavrataparāmarśa-), 此実執取 (idaṃsatyābhiniveśaparāmarśa-) の4つ——と言われるもののことである。また 'sechs Bereiche der Sinneswahrnehmung' というのは、具体的には、六根の対境としての六外処 (六境) のことに外ならない。と言うことは、換言すれば、この経には四身繫や六外処等々のことが説かれている (或いは、キーワードとして見られる) ということになる。

ところで、この身繫 (四身繫) というのは、普段はそれ程見かけることのない言葉のようである。実際、例えば『俱舍論』などでもこの語は採り上げられていない⁹⁾から、その点では、煩悩の分類・カテゴリー化の過程においても、それ程重要視された概念ではなかったのかもしれない。しかし、他方ではまた、この語は阿含經典内の法数集とも言うべき『衆集經』(*Saṅgītisuttanta*, *Saṅgītisūtra* or *Saṅgītasūtra*) ではそのバ漢梵いずれを問わず録載されており、また パーリ『相应部』(*SN vol. V*, pp. 59-60) でもそれとは別に言及されているところを見ると、このような言葉や觀念自体は、既に阿含經典自身の中にあっただとも見得るであろう。

ともあれ、このように Kat.-Nr. 33 の第2経では、四身繫というかなり特徴的なことが説かれているわけであるが、いずれにせよ、パーリの『長部』や『中部』、若しくはそれらに含まれる経に匹敵するような比較的長い經典の中で、この四身繫について触れているような経はない (『衆集經』はさておく)。その点は漢訳の『長阿含經』と『中阿含經』についても同断である。と言うことは、この経はこれ迄のパーリや漢訳からは知られない (それらには伝えられなかった)、全く新しい經典 (阿含經) ではないかということになる。では、もしそうとすれば、この経は一体如何なる類の、また如何なる性格・内容の經典なのであろうか。

III 前置が長くなったが、ここで筆者が言おうとしているのは、もちろんこの経の正体についてである。そして、それについての筆者の結論を前もって述べるならば、実はこの経こそ、一部にその名を伝えられながらも内容については殆ど触れられることのなかった (したがって、実質的には正体不明であった)、『幻網經』(*Māyājālasutra*) と呼ばれるものに外ならない、ということである。

『幻網經』というのは、『十誦律』(大正23, 174b) や『根本說一切有部毘奈耶』(同, 662a) など、有部 (說一切有部) 系の文献を中心にその名が見えるものである。しかし、それらの中では概ねただ経名が伝えられているだけで内容そのもの

(56) SHT Kat.-Nr. 33 中の未比定の梵文阿含断簡について (岩 松)

についての言及は殆どなく、他方また、これに該当するような(同名の)経はパーリ・漢訳いずれの阿含経にも見られないところから、その実体(内容)についてはこれ迄殆ど知られることなくきたものである。ところで、実はこの経は、チベット訳として——しかも恐らくその形でのみ——大蔵経中に伝えられていた⁴⁾(*Mdo chen po sgyu mahi dra ba shes bya ba*=*Māyājāla-nāma-mahāsūtra*; Peking No. 954, Derge No. 288)。そして、筆者はかつてこの経に興味を覚えて調べたことがあったが、SHT を実見するに及んで Kat.-Nr. 33 の第2経との類似に気付き、両者を比較した結果、同一経であることが判明したという次第である。

「幻網(経)」の経名自体は、実はトルファン写本の中にも見られる。Kat.-Nr. 165の一断簡に ‘māyājā[1](a)ḥ [s]ü’ と見える(s. SHT Teil IV, S. 203. ただし、そこではこの経名が知られるのみ)のがそれであるが、これによっても、この名(māyājāla=幻網)がこの経の正式名であったことは、まず疑いないと言えよう。それはともかく、実際に比較対照してみると、この Kat.-Nr. 33 の第2経とチベット訳の両者は非常によく一致(対応)していることが知られる(もちろん、全同ではないが)。そこで、このチベット訳を基にすれば、いくつかの(未証定の)断簡を新たにこの経に証定したり断簡相互の位置関係を定めたりすることはもちろん、断簡間の欠落部分を補うことも、場合によってはかなりの程度可能である。実際、例えば未証定中の Nrn. 39, 40, 41 の3つなどは明らかにこの経に証定し得るものであるし、また 19, 38 の2つなどもそう証定して大過ないであろう⁵⁾。

今ここでこの経の本文について、例えばチベット訳やそれからの復原文、或いは両者の対訳文を掲げたりすることは紙数の都合で不可能なので、ここではその代りに、各断簡の(葉内における)位置関係についてだけ、略図的に示しておこう(次ページの図参照)。

ここで、(該図に関連して)一二コメント的なことを付け加えておくならば、まず、この経は Kat.-Nr. 33 の第10葉(の裏面)から始まるが、そのこと即ち7の断簡が第10葉に属するということは、これと10の葉番号を有する4の断簡を同じくチベット訳の『五三経』(*Pañcatrayasūtra*; Peking No. 960, Derge No. 294)と比較することによって、確かめられる(図では、同一葉に属すると認められる6の断簡も入れておいた)。次に、16の断簡についてであるが、これのA面c行に見られる ‘cakṣurviññeyeṣu rūpeṣu’ の語句は何かの、例えば śrotraviññeyeṣu śabdeṣu 若しくは jīhvāviññeyeṣu raseṣu などの、写誤ではないかと思われる。と言うのは、チベット訳から知られるところ、この葉のこの位置にこの語の現れる余地は

第10葉 (表)

1		1	
2		2	
3		3	
4	○	4	7V
5	4V	5	
6		6	
	$a=4$ $b=5$ 6A $c=6$		

第11葉 (表)

1	1		
2	2		
3	3		
4	○ 9B	$a=2$ $b=3$ 19A $c=4$	$a=2$ $b=3$ 39A $c=4$
5	5		$a=4$ $b=5$ 10B $c=6$
6	6		

第12葉 (表)

1	1		
2	2		
3	○		
4	15A		
5	5		
6	6		
		$a=3$ $b=4$ 11A $c=5$	$a=5$ $b=6$
			12A

第?葉 (表)

1		
2		
3	○	
4		
5		
6		
		$a=3$ $b=4$ 16B $c=5$ $d=6$

(58) *SHT* Kat.-Nr. 33 中の未比定の梵文阿含断簡について (岩 松)

——他の葉との関係から言って——全くないからである。

所謂トルファン写本の中で、この『幻網經』に比定さるべき写本の断簡は、実は外にもいくつか見られる。前述の Kat.-Nr. 165 中の「幻網(經)」の經題を有するもの (Nr. 29) もその 1 つであるが、それ以外でも、例えば Kat.-Nr. 883 の b や Kat.-Nr. 1025 など、明らかにそう認められるものである (前者は *SHT* Teil III に、また後者は Teil V に、それぞれローマ字転写されている)。しかしその反対に、*SHT* Teil IV でこの經に同一視された Kat.-Nr. 165 中の Nr. 1, 2 の 2 つのうち、少なくとも 1 の方はこの經のものではないであろう。

IV 『幻網經』は、三学の中でもとりわけ増上慧学 (*adhiprajñam śikṣa*) を重視し、それに随順して生きることによって智慧の生活 (慧命) を送る (*prajñājīvikāṇaṃ jīvati*) べきことを強調して説く經典である。II で若干触れた四身繫云々というのも、実はその際に断捨さるべき対象として採り上げられ(言及され)ているものに外ならない。一方、この經は殆ど有部系の文献でのみ言及されて他の部派では触れられていないところを見ると、或いはこの部派(有部系)だけに伝えられた、またその意味から言っても、成立史的にも(最も)新しい經典(阿含經)ということになるのかもしれない。

ともあれ、多少大袈裟な言い方をするならば、その名のようにこれ迄幻の如き存在として捉えられてきた經典が、チベット訳や断簡とは言え一部サンスクリット原典という実体を伴って、ここに漸くその姿を現して来た、ということにでもなるであろうか。この『幻網經』については、論ずべき点はまだまだ多々存するが、今は如上の報告に留め、爾余は次の機会を俟つこととしたい。

- 1) 既刊 6 冊。ただし、第 6 冊は本稿作成時には参看できなかった。
- 2) *SHT* Teil IV の研究で 2 番目に採り上げられている經の意であるが、実際にもこの經が該写本の 2 番目に位置していたろうことは、いくつかの徴証からも疑いない。
- 3) ただし、*Abhidharmadīpa* では採り上げられている (p. 305 参照)。
- 4) (チベット訳の)『幻網經』の存在自体は、実は以前から指摘されて知られていた。またその内容に関しても、ごく一部についてであるが、佐々木閑氏が触れておられる (*Mahāsūtra*——『デンカルマ目録』にあらわれる根本有部系經典群——)『仏教研究』第 15 号、107 ページ注 4) 参照)。したがって、ことチベット訳に関する限りは、筆者はその発見者でも最初の研究者でもないということになる。
- 5) 因みに、19 の断簡は、*SHT* Teil IV では別の經に証定されているものである。

〈キーワード〉『トルファン写本目録』、サンスクリット阿含經、『幻網經』、説一切有部
(東方研究会専任研究員)